



ya

No. 28
2007.4.10



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

私の稀覯本ノート その28

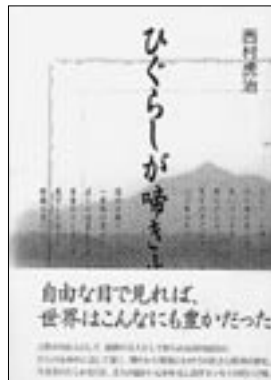
○野溝七生子という存在

椎窓 猛

平成18年3月久世光彦が亡くなり、吉村昭逝き、今年になって城山三郎没し、つい先の3月、コメディアン植木等の訃報に、昭和を描き、語り、歌い踊った人びとがあいついで冥府への旅立ちとなっている。『東京人』という雑誌があるが、これもこのごろの号には「昭和30年代」の東京、都電が走っていた町の回想特集をくんでいる。遠く去り逝く昭和郷愁が懐旧されるかのような昨今である。

なかでも久世さんは昭和初年から妖艶の色どりをすくいとった作家であったといえよう。いちど私は『昭和幻燈館』についてノートに書いたが、またとりだして読み返しているうちに、「山梔伝説—野溝七生子」と題した一章を精読した。

〈山梔〉と書いて〈くちなし〉と読むと書きだし、アカネ科の常緑樹で夏に白い六弁の花が開きいい匂いがすると説明し、「山梔」という不



○「ひぐらしが啼き止んで」 「みかんの花咲く丘」

西村 虎治

ひぐらしが啼き止んで
山の端が赤く焦げた
遠い日の月夜の山に
狐火がふわりふわり
気を付けて行きやんせ
ふと母の声がした—(序詩)—

西村さんは1926年、鹿児島生まれだが、現住所は鳥栖、永年国鉄勤めであったと随筆に語られている。

「ひぐらし……」の方には、詩人岡田武雄氏のていねいな解説が



つけられている。お二人は、矢部村“杉の里”での「九州文学」同人の集いが出会いのきっかけであったようだ。あの集いは、発行者高尾稔氏の相談で私が企画したのであったが、こうした出会いがあったとはこの著作を読んで、初めて知った。詩人岡田武雄氏の風貌がよく描かれている。

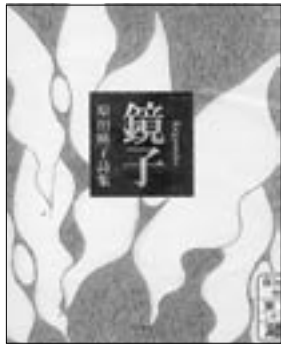
『みかんの花咲く丘』は日本随筆家協会賞の随筆を中心に集録されたもので、山歩き好きの西村さんの興味がうかがわれる好著である。



思議な小説、そして大正12年、福岡日日新聞が募集し、徳田秋声、島崎藤村、田山花袋の選で特選に入選した作、作者は東洋大学文化学科第1回生、27歳、野溝七生子。

久世さんは『野溝七生子作品集』を書店で手にしたときの感慨を書いている。「ヴァン・ダイクが描いたようなバロック風の天使たちが外函の表を飾り、装幀は典雅な濃い茶色の布張り、そして巻頭的一篇が幻の

「山梔」。私もこの作品集を持っているが、久世さんの一章を読んで求めたものか、あの頃出版元立風書房につとめの親しかった富永弘志君が恵贈してくれた一冊であったか、記憶がアイマイ。昭和58年発行、定価7000円という豪華本である。この本が刊行された年には野溝七生子は85歳。若き日の著者のモダンな容姿と老婆の近影、2枚の写真がまた「山梔伝説」を思わせる。



顎をつき出して朝がはいってくる
 棚のうえの不眠の瓶にあわてて蓋をする
 夜の搜索灯をにぎりしめたままだったので
 かつかつと不器用な音をたててしまう
 たちまち瓶のながが汗ばんでくる
 ふりかえりぎわに
 アサヤケはと訊ねると

一目散

原田 暎子



○久留米餅と私……
 随筆25選集

エッセイ25編に、写真32枚の久留米餅にまつわるおはなし、それに餅のある風景がなごやかに編みだされている。

「母は嬉しそうに畳紙を開いていた。参観日にどれを着ていこうか……」餅の着物に和傘、為房梅子さんは50年もむかしの母の姿を「いつもとちょっとちがった雲囲いの母」を餅着と思いあわせて綴られている。

広川町商工会発行のきれいなそして貴重な一冊である。

振り返りにあったのだという
 だれにと驚いてかさねて訊ねると
 しらん とさらに顎をつきあげるように
 出してくる
 その力才が
 陽の光を食いしばって
 いちぞくの修羅の隈取りめがけて
 一目散に明け放っていく

- 校友会誌
 見崎中学校 「みさき」
 南中学校 「みなみ」
 黒木高校 「山 峡」

こうした記録的な校友会誌も、「自分史図書館」には収蔵したいと考えています。

3月、学年末には、それぞれの学校で、一年間の歩みがまとめられ、学びの成果が一冊にまとめられる。

たとえ小さな冊誌であろうとも貴重なメモワールとして評価されます。



○少年期

酒井 偉雄

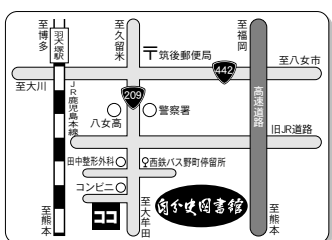
あとがきに「ふと、遠い過ぎし日の少年期を思い出したのは、並木路子の『リンゴの唄』を聴いていた時でした。少年時代はなんの

屈託もなく友達同士で毎日楽しく遊び、薄暗くなるまで時の過ぎるのも忘れ飛び回っていました」。著者は昭和5年生まれ。昭和61年、NTT退職、趣味は読書とあるが、地方の凧揚げ大会に参加。各種の賞を受賞のよし。小学生のころから、終戦の日までのおりおりの回想でまとめられたエッセー集である。1年生から4年生まで担任であった女の若い先生の思い出から、少年の日々があざやかに描きだされている。

蔵書目録④ができます ￥100 円 80 (郵便切手可)

自分史図書館

入館無料
 開館 午前9時～午後5時
 閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。
 貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8
 TEL・FAX 0942-53-8122
 西鉄バス野町停留所より徒歩5分

インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitsosyokan

受贈図書紹介は今月休みます。

午前中に一段である。
 (自分史図書館長 推窓)

編集掌記

3月27日。朝から絹糸のような春雨。山舎かたわらの一本の桜が八分咲きといったところ。福岡市郊外に住む娘、孫らが里帰りしてにぎやかであったが、一昨日、戻ったのでわが家は閑散。自分史図書館への寄贈本をコタツに一杯ひろげて、「YA」4月号の編集。孫がいたら「おジイちゃん、アンパンマンを踊りましょう。さあ、たつてー」とうながされ、こんな仕事はできたものではない。そんなことを思いながら、せつせと仕事をすすめて